



## 幼少時代

青々とした野方が闇から浮きだし、微光を浴びた小鳥がチーチーさえずり轉まわつてねぐらを離れる頃、鷺野谷の村から畑々から林へと、涼しい澄みきった鉦鉦の遠うねが響く。「念仏嘉平さん」の毎朝のおつとめである。

山 崎 家

そのすむ頃静かな村の家々の台所から薄白い煙が木だちの緑を縫い昇る。竈かまどに火をたいているお母さんに残された蒲団ふとんの中で、目をさました可愛いざかりの幼年啓之助さんの純白な柔かい魂は、わけもなくこの鉦かねの音につりこまれ、何をあくがるともなく、いとけない目が底のない深みを見

つめてぼんやりと光る。南無阿弥陀仏々々々。

お父さんが食前には必ず数粒のご飯粒をとりだして、せじき施食の作法をしてうやうやしく合掌念仏する。またきまつて寝前には「南無なむさいほうしてんごくせかいあみだぶつ西方極樂世界阿弥陀仏たすけたまえ」とあらたまつた表情で合掌十念する。

お父さんの日々の念仏のほかこれらのことも、見聞するいとけない感じやすい魂に刻みつけられて、いのちの奥から一層奥深いものが自ら湧きでるみちがつくのであつた。

### 温和剛気

世の移り変りと没交渉な辺鄙な農村に、なにも変つたこともない平和な年は明け年は暮れていった。丈夫にふとつて、なにでも好き嫌いなくうまそうに食べて、スクスク生長した啓之助さんは、おとなしく、常にだんまり勝ちで、あまり口をきかず、荒々しいことは嫌いで遊び友達と喧嘩などせず、女の子や幼い者をいじめたり、きょうだい弟妹を泣かしたりすることはなかつた。

家の前で弟らと遊んでいるかと思うと、いつしか隣の善竜寺に行つて、年長の少年広瀬堅信氏（後東京田端の東覚寺に住し又真言宗一派の管長となる。一生親交あり）が手習いをするのを側でみていて、手習いの反古紙を買つて喜ぶ。堅信氏は「おとなしい子だ」といつて、蟬とりの袋など

作つてくれるが、とんぼ釣りや蝉とりは嫌いであつた。

同年輩の人たちが野馬捕どりという殺伐な村の行事のまねをして遊ぶ時は、列に加わらずただ側で見ていただけであつた。気丈な性たちの姉せきさんにどんな事をいわれても、いい返しなどしたことはなく、何かして父上からやかましくいましめらるる時には涙をこぼして聞いていた。

かくなごやかであるとともに、一面我慢の強い、気性の勝つた所があつた。七八歳の頃、虫干してある先祖伝来の脇差し（かわり銭ともいう）を遊び友達に与えたので、懲らしめのために或夜中お父さんから家の裏の木に縛りつけられた。よほど時がたつてから（朝になってともいう）お母さんが詫びさせるためにつれに行くと、縛られたまま泣いたようすもなく、じつとしていた。

### 道念自発

幼時から仏さまに関する事を好み、寺宮の参詣となれば、何をして遊んでいてもそれをよして、両親につれられて行きたがつていた。また、仏さまや出家の人を書いた絵を好み、始めは父上の書物の絵を彩色して遊んだが、のちには子供ながら自分で仏画を書いてみたり、これを彩色したり、また切り取りなどして遊ぶこともあつた。

## 通 学 時 代

### 九歳通学

慶応三年（一八六七）世は明治の御一新となるその前年ではあるが、平和な農村には別にたいした変りもなく、啓之助（九歳）さんはこの年二月から手習いに行き始めた。始めは郷内の父方の親戚小川八郎左衛門氏、次は母方の縁戚で無産酒豪なる柳戸の高橋量平氏、それから泉の松田文平氏、および泉の長谷部五郎氏等についた。九歳から十五歳まで就学した六年間に、師匠の代るたびに次の師匠の定まるまでの休みが長く師匠についたのは前後通算して正味三年位の稽古であった。手習は当時一般の習いとして、いろはより始まり、名頭ながしゅ、村名、国づくし、実語教、教訓往来、江戸名勝（八百八町）男消息往来、筆道訓、今川男庭訓往来、それから大学中庸等の順序となっていた。家には絵入百人一首の本があつてよくそれも写した。手習いは六斎（五日習つて六日目）に清書、月の十八日におさらいをした。教わる前に「読んで見ますから聞いていて下さい」といって、行きなり教わるのを嫌った。手習が馬鹿々々しくてその時間によく画えがきを彩り、大小した天神様や仏様などを書いた。軍談書は好きで、これを写してあとで人にも見せた。中にも曾我物語が好きであった。師匠も「始末におえぬ子だ」とこぼし

ていたが、のちにはその師匠まで軍書を写さして読み、その写した冊数は実に夥しいものであった。負けるのが嫌いで、力づくで勝つ子供を学問で負かし、腕白どもに一目おかれていた。師匠のいう通りの手習はせぬが、学問ができるものであるから師匠もやかましくはいわれなかつた。

### 学を好み世才疎し

学ぶに他の児のごとく声を立てては読まず、多くは黙つて読みあるいは写して覚えた。弟も同じく手習に行つた。この方は学問好きの兄

と異り、世才にたけていて、家ではむしろ兄分であつた。ある時弟と二人で使いにやられたが、世才には極めて疎といので、授かつた使いの口上を間違え、弟が覚えていて教えてくれた。年を重ねるにしたがいますます神童らしい類たぐひ稀なる知能をあらわしてきた。当時の述懐を、

「小童年已に十歳に垂なんくとする時自ら詠読して己が志を暢のぶ」と題したる歌に、

「植て見ん学びの園に道の樹の花さく千代にほうらん」

「小童十一歳に垂んとする時詠読して己が志を暢のぶ」と題して、

「いにしえのかしこき人のあとぞかしふみ見てゆかん経ふなの道芝」

「いにしえのかしこき人の道ぞかしわれはふみみてえものこすまじ」

「為レ兒嫌ニ竹馬」

唯好ニ書籍類ニ」

不子学道は懐

懐心志を以て懐

懐く心志を以て

懐く心志を以て

正懐

不子学道は懐

懐心志を以て懐

懐く心志を以て

正懐

不子学道は懐

懐心志を以て懐

懐く心志を以て

懐く心志を以て

懐く心志を以て

懐く心志を以て

懐く心志を以て

懐く心志を以て

作歌は十二歳の時 書は後年

明治三年（一八七〇）「十二歳の時学文を好み願くば古賢聖の道（こけんせい）悉く学ばずんば己が志にみたず古の道をしたう」と題して、

「天が下ひじりの道のくさぐさのふみ見てわれは何のこすべき」

和歌は幼より好むところで、十二歳の時は歌幾十首となく作った。南無阿弥陀仏あるいは南無妙法蓮華経を冠したるもの、七夕等いろいろ作った。これらの歌は皆かくしていたのを父上に見つけられ、つまらぬことでもすると、よく「歌まで作るものが」と小言の口上にされていた。

「植おかん学びの園にいろくくの文の華さき香やにほい（てぞ）」  
「いにしえのかしこき人のあと恋し文（ふみ）みてゆかん其道芝を」  
「いたづらになぞ手枕を照すべき文をよめとの窓の月かげ」  
「南にしをはぐ無かしひじりの阿とこいし弥ちを陀づねつゝ仏を見ん（こそ）」十二歳のとき

（註）この中に前記の歌とほとんど同じ歌あり、前記十歳等とあるはあるいは写誤にあらざるか、東京大震災に焼失して実物なし）

父方一族の養子が江戸で御家流の書を学び帰り書いた歌を手本に一心に稽古し、七日間で御家流が上手になり人を驚した。

### 聖賢の志・信心自発

十二歳の頃からは医王寺から仏書を借りて読み、あるいは写した。儒者になりたいとも思ったが漢学より仏書を好み、学問して聖賢に

なりたいと願った。

「仏にも神にもなると聞くからは吾は聖にならまほしけれ」 (十二歳の時)

幼より好んで仏様を画き、あるいは彩り、十二歳頃には平生よく雲上に仏様のあらわれ在したところを画いて楽しむほどであった。しかし父上が強るでもなし、称名はしてはいたがきまつて勤めたわけではなく、うぶな少年の心の自然に傾くだけ念仏して、信心なき家人の或者には気がつかぬくらいであった。それでも天性の傾向と両親の感化の下に、純精なる信心はおのづと培われた。

### 三尊影向

秋の彼岸の中日、入る日を拝まんとしたる時、「幼時十二歳、家に在りし時、杉林の繁れる前に在りて、西の天霽わたり、空中に、想像にはあれども、三尊の尊容儼臨し給うことを想見して、なんとなくその靈容に憧憬して、自ら願すらく、われ今この想見せし聖容を靈的实现として瞻仰し奉らんと欲して欽慕惜く能わざりき」(註―文はご晩年)



杉林より家の裏西の天を望む

明治三年（十二歳）十一月八日弟恒吉さんが九歳で病死した。風も悲き寒空に淋しい庭を飛んで行く一羽の鳥の影を没した宵闇よいぢみの彼方の世界に、子供心のいかにさそわれて行つたことであろう。

一方では老いては仕事もなく念仏のみしていた祖母さん、勇猛精進のお父さん、信心深いお母さんの家庭の信仰の雰囲気きんぐいに包まれ、一方には寺小屋式の漢学の手ほどきをうけたり、寺から仏書を借覧しつつ、それから三年の向上をつづけた。